養護教諭志望学生のジェンダー意識

――私立大学における教職科目での調査から――

池　上　　徹*

A study on the view of gender the students who want to be Yogo teachers have, through research among them at a private university

Toru Ikegami

要旨：教育社会学においてこれまで養護教諭についての研究はほとんどなく、まして養護教諭志望学生についての研究は皆無に等しい。一方で養護教諭は母親役割と強く関連づけて述べられてきた。そこで本研究では養護教諭に対するジェンダー研究の手始めとして、養護教諭志望学生に対してジェンダー意識を中心に質問紙調査を行った。その結果、まず教師を志望する理由を複数回答で聞いたところ「女性（男性）に向いているから」を選んだのは養護教諭志望学生では 9% いたものの教科の免許を取得しようとする学生では一人もいなかった。一方で養護教諭志望学生のほうが理想の夫婦関係では専業主婦志向よりもキャリア志向の面がみられ、ジェンダー観についてもジェンダー・フリーな志向が一部見られた。しかしながら養護教諭志望学生の中で 1 年生と 3 年生を比較した場合には特性論的な発想に差がなく、大学教育ないし教職課程として、ジェンダー・フリーな養護教諭をいかに養成するかは今後の課題である。

Abstract : The sociology of education has a few studies of Yogo teacher, but has no study of the students who want to be Yogo teacher. Generally, Yogo teacher is strongly connected with a mother role. So I am interested in the relationship between Yogo teacher and gender. This study uses a questionnaire to survey mainly the view of gender for the students who are trainning for Yogo teacher.

This report says that nine percent of students are studying for Yogo teacher because“a teacher is suitable for a woman (a man)”, but none of sutdents are studying for a teacher except for Yogo for the same reason.

On the other hand, the students who want to be Yogo teachere tend to like to have business career more than to be full time homemeker as an ideal wife. They also tend to consider the gender equallity acceptive.

However, when it compared third grade students with first grade who want to be Yogo teacher, a view of sexism does not have a difference. This means that university education and the teacher training course play no role in the gender education. So it is important how we train Yogo teacher there who has the sense of the gender equity.

Key words：養護教諭 Yogo Teacher　教員養成 teacher training　ジェンダー意識 the view of gender　質問紙調査 questionnaire　教職課程 a teacher-training course

---

*関西福祉科学大学健康福祉学部　准教授

1　教育社会学研究における養護教諭

教育社会学において、養護教諭はジェンダー意識と非常に強く関連づけて述べられてきた。「学校のお母さん」（深谷　2000[1]）や「保健室のおばさん」（鈴木　1999[2]）といった例を挙げることでわかるように、それは女性役割と密接につながっている。

一方で、教育社会学において養護教諭自体についての研究はこれまでほとんど行われてこなかったと言っていい。代表的な研究として、秋葉（2004[3]）によるエスノメソドロジー研究をあげることができるが、秋葉もその中で「教育社会学研究の領域においても、保健室・養護教諭（中略）について考察されることがなかったのが実情」[4]と述べている。教育社会学における教師研究は数多く存在するが、これまで教師研究の中で養護教諭に焦点が当てられることは皆無に近かった。それは教師研究の中で特に教員養成に限っても同様である。

養護教諭に関わる量的調査となるとさらに少なく、先に挙げた深谷による 1991 年と 2000 年の調査の他に、小島の調査[5]、それに秦（2002[6]）による教員調査の中に養護教諭が含まれている程度で、ましてや教育社会学における養護教諭志望学生への量的調査となると、今のところ全くと言っていいほど手がつけられていない状態である。

教師研究が教育社会学において大きな一つの分野であるにもかかわらず、養護教諭に対する研究がほとんど行われてこなかったのは、一つには教室にいるわけではない、すなわち教育行為を直接担当する教員ではない、ということがあるだろう。また教育社会学では海外の研究モデルが日本でどのようになるかということに大きな関心がある場合が多いが、養護教諭は日本独自の資格のため対応する海外での資格がない、といったことも影響していると思われる。さらには、秋葉も指摘するように養護教諭がこれまで学校において周辺部に位置され注目されることが少なかった、ということもある。

2　教師研究における ジェンダー問題と養護教諭

教師研究としては、周知のようにジェンダー問題は一つの大きなテーマである。様々な教育社会学におけるジェンダー研究が、学校におけるジェンダーの再生産の問題を指摘し、その担い手である教員を問題にしてきた。例えば教員自身が持つジェンダーバイアスや隠れたカリキュラム、教員組織のジェンダーの偏りなどのジェンダー構造を挙げることができる。しかしながら、ここでも養護教諭が取り上げられることはなかった。養護教諭が先に述べたように女性役割の中で述べられてきたにもかかわらず、である。

それは教員養成に限定しても同様で、教科や校種に注目したり、河上や亀田らによる研究（2000[7]）もあるが、養護教諭養成ないし養護教諭養成課程に着目したものはない。

3　養護教諭とジェンダー

このような状況は、養護教諭ないし養護教諭養成が全体としての規模が小さいことも影響しているだろう。また、これまでの養護教諭養成が国立大学教員養成学部を除けば、看護系の大学・短大や教育系でも女子短大などが中心であったため、ジェンダー研究としてはそちらの問題がまず先にあり、養護教諭に注目されてこなかった、とも言える。

一方、養護教諭教育学会では、ジェンダー問題はほとんど注目されてきていない。養護教諭とジェンダーの関連について一言触れる研究も出てきてはいるが、例えばそれは養護教諭の専門性が理解されない際にジェンダー構造がある、という指摘の段階にとどまっている[8]。

しかし、最近は共学の大学で養護教諭を養成するようになり、また採用面でも東京都や大阪府で男性の養護教諭が採用されるようになった。養護教諭を女性のみの職種と限定する発想

は終わりを迎えたと言っていい。

さらに、ジェンダー研究が指摘した学校の問題を追及していくのであれば、女性役割として語られる養護教諭自身が、どれだけジェンダー・フリーな教育を実践できるかが問われてくることになる。そこでは「お母さん」「おばさん」と語られてきたこととのせめぎあいが起こってくるだろう。

本論文は、そういった研究の方向の手始めとして、養護教諭志望の学生のジェンダー意識を調べるため、発表者が勤務する大学の学生に対して量的調査を実施したものである。

調査票の作成にあたっては、村松ら（2005[9]）による教員志望学生の調査を参考にし、間接的な比較ができるように試みた。

4　調査概要

1. 調査枠組み

本調査における枠組みは以下のようなものである。

①養護教諭志望学生のジェンダー意識が、教科の志望学生とどのように異なるか
②養護教諭志望学生の教員志望動機が、ジェンダー意識とどのように関連しているか
③同じ養護教諭志望学生でも、学習が進んだ3年生と進む前の1年生とで違いがあるか
④「ジェンダー」という言葉の認知度

2. 調査対象者

関西福祉科学大学において「教育原論」（社会福祉学部・健康福祉学部）および「総合演習」（健康福祉学部）を受講した学生、計340名。

1年次開講の「教育原論」では中学社会、高校公民、高校福祉の免許取得が可能な社会福祉学部の学生と、健康福祉学部で養護教諭の免許取得が可能な健康科学科、栄養教諭の免許取得が可能な福祉栄養学科の3タイプの学生が同時に履修しており、養護教諭志望の学生とそれ以外の教員志望学生との比較が可能になる。

3年次開講の「総合演習」では、2年次に既に発表者による「教育社会学」の講義でジェンダーの基本的な学習を終えており、教職課程においてジェンダーのことを大学で学ぶ前の1年生との比較が可能になる。

また、調査時では社会福祉学部では「教育原論」が教職科目としてではなく、卒業単位として認定される専門科目に分類されていたため、教員免許取得希望ではない学生も受講している。そのため、教員免許取得希望学生とそうでない学生との比較も可能になる。

3. 調査方法

授業終了時に調査票を配布し、その場で記入して回収する、集団自記式質問紙調査。

4. 調査実施時期

2006年6月。「教育原論」では、ジェンダーについて触れる前に実施した。

5. 調査項目

出身高校の型や役員経験、大学の志望理由や教職の志望動機、職業観、親族の教員経験者の有無、ジェンダー観等。

表1　男女別・入試の区分別・住居別　教員免許取得希望別（人数）

人　数	男女別(***)		入試の区分別(n.s.)		住居別(***)		教員免許取得希望(***)	
	女子	男子	推薦入試等	一般入試等	自宅	下宿	する	しない
社会福祉学部	47	70	61	53	94	23	87	30
健康科学科	172	3	117	58	103	72	173	2
福祉栄養学科	36	12	26	21	34	13	44	3
合　計	255	85	204	13	231	108	301	35

表 2　回答者属性　学年別（***）（人数）

人　数	1 年	2 年	3 年	4 年	合計
社会福祉学部	96	10	8	3	117
健康科学科	89	6	78	2	175
福祉栄養学科	29	0	12	7	48
合　計	214	16	98	12	340

6. 回答者の属性

3 種類の免許別に回答者の属性を表 1 にまとめた。健康科学科はほとんど女子で、社会福祉学部と比べて推薦入試での入学が多く、下宿生の割合が高い。表 2 は学年別で、健康科学科は「総合演習」でも調査を実施して 1 年生と 3 年生がほぼ同数となっている。

5　調査結果

まず出身高校のタイプについて確認したのが表 3 である。健康科学科は公立高校出身が多いが統計的に優位な差はなく、別学の高校出身の割合は社会福祉学部と差はなかった。また、出身高校の所在都道府県については表 4 のとおり、健康科学科は他学科よりも大阪府出身者が少ない。

ここからは、教員志望の学生で比較するため、社会福祉学部は教員免許取得希望学生のみ、健康科学科は女子のみとしてこの二者間で比較をし、福祉栄養学科のデータは少数のため参考にとどめる。

中学・高校時代に経験したことがある役割については、健康科学科と社会福祉学部で統計的に有意な差はなかった。養護教諭を志望しているからといって保健委員の経験率が統計的に有意になるほど高いわけでもない。ただし、全体として「経験はない」が少なく、教員免許取得希望学生の特徴が見られる。

表 6 は在籍大学が第一志望だったかどうかで、これも志望する免許による差はない。

ただし、表 7 のとおり大学の志望動機では、複数回答の中で健康科学科の学生の場合ほとんどが「教員になりたかった」を選択しており、教職への強い希望がみられる。一方で、健康科学科は社会福祉学部ほどには学科に魅力を感じておらず、免許が目的で入学していることがわかる。

その志望動機の中でもっとも重要なもの一つだけを選ばせた結果が表 8 で、健康科学科の教職希望の傾向がさらにはっきりする。

表 9 は、その教職にどの程度の意志で就きたいと思っているかについてたずねた結果である。ここでも養護教諭志望学生の意志の強さを見ることができる。

この表 9 の質問で「なんとしても教員になりたい」「できれば教員になりたい」と答えた学

表 4　出身高校の所在都道府県（*）（人数）

人　数	大阪府	大阪府を除く近畿	近畿以外	合計
社会福祉学部	62	40	15	117
健康科学科	64	72	39	175
福祉栄養学科	22	14	12	48
合　計	148	126	66	340

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001）

表 3　出身高校のタイプ（人数）

人　数	国公私立別（n.s.）			共学･別学別（***）				合計
	公立	私立	国立	男女共学	女子校	男子校	男女併学	
社会福祉学部	77	39	0	103	3	9	3	117
健康科学科	144	30	1	158	17	0	0	175
福祉栄養学科	37	9	2	46	2	0	0	48
合　計	258	78	3	306	22	9	3	

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001）

表 5　中学・高校時代に経験したことがある役割（複数回答）（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
生徒会会長	5.7	2.0	2.9	0.0	0.0
生徒会副会長	2.9	2.0	7.1	9.7	0.0
委員会の委員長	22.9	15.7	15.3	19.4	27.3
委員会の副委員長	8.6	9.8	12.9	16.1	0.0
部活動の部長	31.4	17.6	22.9	19.4	18.2
部活動の副部長	11.4	23.5	20.0	12.9	18.2
学級委員	40.0	43.1	42.4	45.2	27.3
保健委員	25.7	29.4	38.2	29.0	18.2
上記以外のクラスの委員	60.0	43.1	51.8	51.6	81.8
経験はない	2.9	9.8	5.3	6.5	9.1
合計（人数）	35	51	170	31	11

表 6　在籍している大学は第一志望の大学だったか（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
第一志望だった	51.4	47.1	45.3	34.4	45.5
第一志望でなかった	48.6	52.9	54.7	65.6	54.5
合計（人数）	35	51	170	32	11

表 7　在学中の大学を志望した動機（複数回答）（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
教員になりたかった	20.0	33.3	94.7	21.9	9.1
教員以外の資格が欲しかった	37.1	33.3	4.1	43.8	36.4
専門的な仕事に就きたかった	77.1	68.6	18.1	59.4	63.6
魅力的な学科があった	42.9	29.4	23.4	28.1	63.6
自宅から通える	42.9	39.2	32.7	50.0	36.4
大阪にある大学に通いたかった	25.7	27.5	33.9	25.8	18.2
親に勧められた	2.9	11.8	7.6	15.6	0.0
高校の先生に勧められた	8.6	11.8	7.0	12.5	0.0
学力的に適していた	22.9	19.6	17.1	18.8	18.2
推薦の枠があった	14.3	19.6	12.3	15.6	9.1
入試の方法が自分に合っていた	17.1	17.6	18.7	21.9	18.2
その他	14.3	7.8	4.7	6.3	0.0
合計（人数）	35	51	17	32	11

表 8　在学中の大学を志望した動機の中で最も重要な志望動機（%）（***）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
教員になりたかった	0.0	7.8	89.9	6.5	0.0
教員以外の資格が欲しかった	20.0	13.7	1.2	32.3	9.1
専門的な仕事に就きたかった	48.5	41.2	1.8	32.3	45.5
魅力的な学科があった	14.3	11.8	0.6	9.7	27.3
自宅から通える	5.7	2.0	0.6	9.7	9.1
大阪にある大学に通いたかった	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0
親に勧められた	0.0	3.9	0.6	3.2	0.0
高校の先生に勧められた	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0
学力的に適していた	2.9	2.0	0.0	3.2	0.0
推薦の枠があった	0.0	3.9	1.8	0.0	0.0
入試の方法が自分に合っていた	0.0	3.9	1.2	3.2	9.1
その他	8.6	7.8	1.8	0.0	0.0
合計（人数）	35	51	169	31	11

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001　比較は健康科学科と社会福祉学部間で行っている）

表 9　教員志望（%）（***）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
なんとしても教員になりたい	5.9	14.0	35.3	6.5	18.2
できれば教員になりたい	35.3	56.0	49.1	51.6	45.5
教員になってもならなくてもよい	41.2	24.0	11.4	35.5	27.3
あまり教員になる気はない	14.7	4.0	3.6	6.5	9.1
教員にはなりたくない	2.9	2.0	0.6	0.0	0.0
合計（人数）	34	50	167	31	11

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001　比較は健康科学科と社会福祉学部間で行っている）

生に対してのみ、教員を志望する動機を複数回答で答えてもらった結果が表 10 である。統計的に有意な差はないが、健康科学科は「比較的男女平等だから」と答えた割合が社会福祉学部より多い一方で、「女性（男性）に向いている」を選んだ学生が社会福祉学部はゼロだったのに対し、健康科学科は 1 割近くいる。ただし、表 11 のように、最も重要な動機となるとどちらの選択肢も選んだ学生は一人もいない。

また、表にはしていないが「職業選択において重視すること」についても、まず複数回答で選択してもらった上で最も重要なことを一つだけ選んでもらった。その最も重要なことの選択肢の中で、「女性（男性）らしい仕事である」という選択肢を選んだのは、社会福祉学部では一人もいなかったが、健康科学科では一人だけ回答していた。

次に、理想の夫婦関係についてたずねたのが表 12 である。統計学的に有意な差はないが、健康科学科の学生のほうが、社会福祉学部の学生よりも完全な平等分担を望む割合が高く、その分強い専業主婦志向の回答は少ない。また、

表 10　教員を志望する動機（表 9 で「なりたい」と答えた学生のみ、複数回答）（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
大学で学んだことがいかせる	35.7	33.3	35.4	55.6	14.3
経済的に安定している	42.9	27.8	41.0	44.4	85.7
ずっと地元で働くことができる	14.3	8.3	6.3	11.1	0.0
素晴らしい先生と出会った	28.6	44.4	53.5	11.1	42.9
ひどい先生と出会った	0.0	13.9	11.8	0.0	14.3
子どもが好き	78.6	58.3	73.6	61.1	14.3
今の日本の教育を変革したい	7.1	11.1	4.9	5.6	0.0
休日や休暇が多そう	0.0	8.3	8.3	22.2	14.3
比較的男女平等だから	7.1	5.6	16.7	22.2	0.0
女性（男性）に向いている	0.0	0.0	9.0	11.1	0.0
家族や親戚に勧められた	7.1	22.2	7.6	22.2	14.3
学校の先生に勧められた	0.0	5.6	2.8	5.6	0.0
その他	14.3	11.1	17.4	11.1	0.0
合計（人数）	14	36	144	18	7

表 11　教員志望動機の中で最も重要な動機（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
大学で学んだことがいかせる	0.0	17.1	8.5	35.3	14.3
経済的に安定している	7.7	5.7	12.0	17.6	71.4
ずっと地元で働くことができる	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0
素晴らしい先生と出会った	7.7	22.9	24.6	0.0	14.3
ひどい先生と出会った	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0
子どもが好き	69.2	34.3	37.3	11.8	0.0
今の日本の教育を変革したい	0.0	2.9	2.1	2.1	2.1
休日や休暇が多そう	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
比較的男女平等だから	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
女性（男性）に向いている	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0
家族や親戚に勧められた	7.7	8.6	0.7	5.9	0.0
学校の先生に勧められた	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0
その他	7.7	8.6	12.0	5.9	0.0
合計（人数）	13	35	142	17	7

社会福祉学部の男子は、女子に比べてパートナーに専業主婦を望む割合が高いこともわかる。

ジェンダー観については、11 の項目をあげてそれぞれどのように考えるかを尋ねる形式とした。表 13 は、その回答で「そう思う」「少しそう思う」を合わせた割合を表している。どの項目についても健康科学科と社会福祉学部との間で比較した場合に統計的に有意な差はなかっ

表 12　理想の夫婦関係（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
夫は仕事中心、妻は家事や子育て中心の生活	5.7	7.8	1.8	3.0	0.0
夫は仕事中心、妻は家事や子育てをしながら仕事もする生活	0.0	3.9	4.1	6.1	0.0
夫は仕事をしながら家事や子育てに協力、妻は家事や子育ての生活	17.1	25.5	15.2	3.0	45.5
夫も妻も同等に仕事を持ち､家事や子育ても 2 人で協力して行う生活	65.7	45.1	73.7	81.8	54.5
妻は仕事中心、夫は家事や子育て中心の生活	2.9	2.0	1.2	0.0	0.0
その他	0.0	5.9	1.2	0.0	0.0
結婚は考えていない	8.6	7.8	1.2	3.0	0.0
わからない	0.0	2.0	1.8	3.0	0.0
合計（人数）	35	51	171	33	11

表 13　ジェンダー観について「そう思う」「少しそう思う」と答えた割合（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
能力や適性は男女で異なる	88.6	80.8	84.2	75.8	100
男女の違いを認め合い、補い合うことが大切だ	97.1	94.2	97.7	97.0	100
女らしさ、男らしさを否定すべきではない	82.9	78.8	81.3	75.8	90.9
平等を求めるなら、女性は甘えを捨てるべきだ	34.3	51.9	46.8	60.6	54.5
能力と意欲があれば、今は女性も差別されない	45.5	61.5	56.1	69.7	63.6
男女は生物学的に異なるのだから、何でも平等というのはおかしい	65.7	63.5	75.9	75.8	63.6
家事や育児の負担は、男性より女性にかかりすぎている	77.1	84.6	88.8	75.0	90.9
結婚生活の重要事項は夫が決めた方がいい	5.7	17.6	9.4	3.0	0.0
恋人同士が喧嘩した時、女性が折れる方がよい	8.8	13.5	11.7	6.3	9.1
義務教育で、もっと男らしさ女らしさを大切にした教育をすべきだ	26.5	44.0	23.7	36.4	25.0
女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい	71.4	52.9	80.5	66.7	36.4
合計（人数）	35	51	169	33	11

表 14　「ジェンダー」という言葉の認知（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
おおよその意味も含め、知っている	77.1	64.7	75.9	58.1	72.7
意味は知らないが、言葉は知っている	14.3	21.6	17.1	22.6	9.1
知らない	8.6	13.7	7.1	19.4	18.2
合計（人数）	35	51	170	31	11

た。また、社会福祉学部の男女間、健康科学科と社会福祉学部の女子のみで比較した場合でも有意な差はなかった。それだけ、この質問については、取得を希望する教員免許や学科による差を超えて一様な状況を表していると言える。

調査では質問紙の最後に「『ジェンダー』と

表 15　どこで「ジェンダー」を知ったか（表 14 で「知っている」と答えた学生のみ）（%）

	社会福祉学部		健康科学科	福祉栄養学科	
	女子	男子	女子	女子	男子
中学や高校の授業で	74.2	60.0	44.9	66.7	88.9
予備校や受験勉強で	0.0	6.7	4.4	0.0	0.0
大学入学前にマスコミで	12.9	15.6	5.1	3.7	11.1
大学の授業で	9.7	15.6	37.3	29.6	0.0
大学入学後にマスコミで	3.2	2.2	1.3	0.0	0.0
その他	0.0	0.0	7.0	0.0	0.0
合計（人数）	31	45	158	27	9

いう言葉を知っていますか」というかたちで、認知度をたずねた。その結果が表 14 である。

1 年生が多い中で認知度は高い方であり、それは表 15 の「どこで知ったか」という質問で「中学や高校の授業で」と答えた学生が最も多いことで裏付けられる。ジェンダー観で見たように、どこまでジェンダー・フリーな行動や実践ができているかは問われるが、少なくとも言葉としての認知度は進んでいる。

6　調査におけるジェンダー観およびジェンダーに関わる項目について

以上の調査結果から、さらにジェンダー観やジェンダーに関わる項目について細かく分析してみた。

1. 1 年生どうしでの比較

社会福祉学部の 1 年生で教員免許取得を志望する学生（女子 30 名、男子 40 名）と、健康科学科で養護教諭の免許取得を志望する 1 年生（女子 87 名）のみで比較した。

その中で特に、教員志望理由を質問した複数回答の質問では、「比較的男女平等だから」という選択肢を選んだのは社会福祉学部では 0% だったのに対し、健康科学科では 21% と、養護教諭志望学生のほうが学校を男女平等の職場と捉えていた。一方で、「女性（男性）に向いているから」という選択肢を選んだのも、健康科学科では 7.4% いて、養護教諭ないし教師を女性向きと捉えている養護教諭志望学生が、少数ながらいることもわかる。

表 16　教員を志望する動機（一部）（複数回答）1 年生のみ（%）

	社会福祉学部		健康科学科
	女子	男子	女子
比較的男女平等だから	0.0	0.0	21.0
女性(男性)に向いている	0.0	0.0	7.4
合計（人数）	13	27	81

表 17　理想の夫婦関係　二項対立　1 年生のみ（%）(*)

	社会福祉学部		健康科学科
	女子	男子	女子
「専業主婦志向」	28.6	46.9	21.7
「キャリア志向」	71.4	53.1	78.3
合計（人数）	28	37	83

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001　比較は健康科学科と社会福祉学部間で行っている）

結婚観については、表 12 の選択肢のうち、上から 3 つを仮に「専業主婦志向」、「夫も妻も同等に仕事を持ち、家事や子育ても 2 人で協力して行う生活」と「妻は仕事中心、夫は家事や子育て中心の生活」を「キャリア志向」とまとめてみた場合、社会福祉学部と健康科学科の間で統計的に有意な差があった。

その結果が表 17 である。健康科学科の学生のほうが働き続ける意欲が強いことがわかる。

ジェンダー観について差があったのは「義務

表 18　ジェンダー観について「そう思う」「少しそう思う」と答えた割合（一部）1 年生のみ（%）

	社会福祉学部		健康科学科
	女子	男子	女子
義務教育で、もっと男らしさ女らしさを大切にした教育をすべきだ(*)	24.1	43.6	18.8
女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい（*）	66.7	47.5	72.9
合計（人数）	30	40	85

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001　比較は健康科学科と社会福祉学部間で行っている）

表 19　ジェンダー観について「そう思う」「少しそう思う」と答えた割合（一部）健康科学のみ（%）

健康科学科	1 年	3 年
女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい（*）	72.9	87.2
合計（人数）	85	78

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001）

教育で、もっと男らしさや女らしさを大切にした教育をすべきだ」と、「女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」の 2 つだった。「そう思う」「少しそう思う」と答えた割合は、前者の質問で社会福祉学部が男女合わせると 35.3 %なのに対し健康科学科が 18.8%、後者の質問で社会福祉学部が 55.7% なのに対し健康科学科が 72.9% だった。健康科学科、つまり養護教諭志望学生のほうがジェンダー・フリーな考え方をしている学生が多い。

表 20　「ジェンダー」という言葉の認知(***)(%)

健康科学科	1 年	3 年
おおよその意味も含め、知っている	63.2	89.6
意味は知らないが、言葉は知っている	24.1	10.4
知らない	12.6	0.0
合計（人数）	87	77

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001）

表 21　どこで「ジェンダー」を知ったか（表 20 で「知っている」と答えた学生のみ)(%)

健康科学科	1 年	3 年
中学や高校の授業で	67.6	20.8
予備校や受験勉強で	6.8	2.6
大学入学前にマスコミで	8.1	2.6
大学の授業で	6.8	67.5
大学入学後にマスコミで	1.4	1.3
その他	9.5	5.2
合計（人数）	74	77

（*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001）

2. 養護教諭志望の 1 年生と 3 年生での比較

次に、同じ健康科学科の中で 1 年生と 3 年生で養護教諭の免許取得志望学生で比較してみた。これは 2 年次の「教育社会学」を経てジェンダー学習の前後の変化を見るものである。

結婚観や様々なジェンダー意識については、ほとんどの質問について 1 年生と 3 年生の間に統計的に有意な差は認められなかった。

唯一あったのは、「女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」という質問で、「そう思う」「少しそう思う」と答えた割合は、1 年生で 72.9%、3 年生で 87.2% と、3 年生のほうが高かった。

これは 1 年生のほとんどが高校卒業直後で、まだ自らが管理職になる（1998 年の法改正で養護教諭も管理職になる道が開けた）ことについて実感がないと思われるのに対して、3 年生は養護教諭に関する科目の中で実際に校長を経験した非常勤講師に講義を受けていることなどが影響していると思われる。

また、「あなたは、『ジェンダー』という言葉

を知っていますか」という質問に「知らない」と答えたのは、1 年生の 12.6% だったのに対し、3 年生では一人もいなかった。「あなたは『ジェンダー』という言葉を、いつ頃、どこで知りましたか」という質問についても、1 年生でもっとも多かったのが「中学や高校の授業で」の 68% だったのに対し、3 年生は「大学の授業で」の 66.7% と、教職課程における講義の効果が確認できた。

7　今後の課題

「養護教諭とジェンダー」というテーマで取り組むべき課題は多く、今回の調査はあくまでもスタートラインに立つための準備段階の一つに過ぎない。

特に今回の調査では、養護教諭が女性役割を期待されていることを養護教諭志望の学生がどう考えるかについて、1 年生を主たる対象とした調査だったこともあり、ほとんど踏み込めていない。また、養護教諭志望学生の特徴をはっきりさせるための比較対象としての、教科の教員免許取得を希望する学生のサンプリングを増やすことも必要である。

さらに、志望動機の中でも数少ないながら女性役割を期待されていることにつながる「女性（男性）に向いている」と答えた養護教諭志望の学生がいたということに対して、どのようにしてそう考えるに至ったか、あるいはそう答えなかった学生との差などを明らかにしていく必要もあるだろう。

一方、結婚観やジェンダー観についての質問で 1 年生と 3 年生の間に差がないことは、知識はついても行動変容まで至っていないと言わざるを得ない。養護教諭がジェンダー・フリーの担い手となるようにしていくためには、大学教育の場でのさらなる実践が必要と考えられる。今回の調査では教科の教員免許取得を希望する学生とも差がなかったが、養護教諭なりの特徴があってしかるべきなのか、検討を重ねたい。

なんといっても、ジェンダー観の質問で 3 年生の大多数が特性論的な発想から脱却できていないということは、大学の教員養成において学生にジェンダー観に関して成長をもたらすことができているのかが問われる。これはこのジェンダー観にとどまらず、そもそも大学での教職課程を履修することによって学生が成長しているのかどうか、また何百人もの大教室における講義でそれが可能か、という視点も重要だ。というのは、養護教諭には様々な「らしさ」のイメージがつきまとうが、学生がそういったものに振り回されずそれぞれの個性を生かした教師になっていかなければならず、教職課程の重要性が大きいからである。

また、本調査は一大学のみのため、国公立・私立の枠を超えて養護教諭志望学生全体の傾向を調べることも今後の課題である。

注

1）深谷和子　2000「『学校のお母さん』としての養護教諭」『モノグラフ小学生ナウ　VOL 20-3　心のケアワーカーとしての養護教諭－10 年後の全国調査－』pp. 2−3、ベネッセ

2）鈴木邦治　1999「学校組織の周縁や曖昧空間から視えてくること」油布佐和子編『教師の現在・教職の未来　あすの教師像を模索する　シリーズ子どもと教育の社会学 5』教育出版

3）秋葉昌樹　2004『教育の臨床エスノメソドロジー研究　保健室の構造・機能・意味』東洋館出版社

4）前掲書、14 ページ

5）小島秀夫　2002「養護教諭の職業的社会化」pp. 90−93『教職研修』2002 年 8 月号、「養護教諭の悩み」pp. 94−97『教職研修』2002 年 9 月号、「養護教諭が体験した困難」pp. 84−87『教職研修』2002 年 10 月号

6）秦政春他　2002「現代教師の日常性（II）『日本教育社会学会第 54 回大会　発表要旨集録』pp. 182−187

7）河上婦志子「女性教員『問題』論の構図」pp. 265−285、亀田温子「教師のジェンダー・フリー学習－ジェンダー・フリーな学校づくりに向けて－」pp. 309−331　亀田温子・舘かおる編著　2000『学校をジェンダー・フリーに』明石書店

8）杉村直美　2004「養護教諭という職－学校内

におけるその位置と専門性の検討－」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第 51 巻第 1 号
9）村松泰子、中澤智恵、木村育恵他　2006『国立教員養成系大学における教育・学習活動のジェンダー分析－大学教員と学生の調査から－』文部科学省科学研究費補助金　研究成果報告書